

■出世についての訓練（2/4）

ウジャ王の生涯はこの訓練の実例であり、彼の経験は私たちのたましいを探らずにはおかない。彼について、こう記されている。「彼がすばらしい仕方で、助けを得て強くなった……。しかし、彼が強くなると、彼の心は高ぶり、ついに身に滅びを招いた」（Ⅱ歴代 26:15、16）。彼の最初の出だしはよかった。年若くして大きな責任を担い、注意深く良心的にそれを遂行した。のちにエレミヤが「人が、若い時に、くびきを負うのは良い」（哀歌 3:27）と記したときに意味したことを、ウジャ王は理解していたのであろう。

青春時代は喜びに満ちているが、また多くの危険がある。一方においては勤勉があり、義務があり、年長者たちの助言に対する服従があり、私たちのうちの最善なるものを促す要求があるが、他方においては敗北の可能性もある。若い人々はしばしば、自分自身を理解しておらず、また他の人々によっても正しく評価されていない。青年男女諸君よ、もしあなたがたが目的をもって計画を立て、忍耐強く備えをし、まじめに勉強し、熱心に奉仕し、にこやかなほおえみをたたえて愛し、柔和で心のへりくだった主をいつも見上げ続けるように、自分のたましいを訓練するならば、あなたがたはまことに幸いである。あなたがたは近道を行こうとして袋小路に迷い込んだり、自分にとってハンディキャップになるような欺瞞的な学習態度や、

職業的な習慣に陥りそうになったりする。あるいは「他の人たちは立身出世して安楽に暮らしているのに、なぜ私ひとりはいつまでもそうなれないのか」などと考えて、たましいをいじけさせ良心をしなびさせる利己主義、自己中心主義に陥りそうになることもある。青春時代こそ勉強すべき時であり、戦い、努力し、奉仕し、心身を強くし、「くびきを負う」べき時である。

ウジヤ王は青春時代の骨折りと労苦を知っていた。「彼は出陣してペリシテ人と戦ったとき……荒野にやぐらを建て、多くの水ためを掘った。彼は……多くの家畜を持っていたからである。山地や果樹園には農夫やぶどう作りがいた。彼が農業を好んだからである。……こうして、彼の名は遠くにまで鳴り響いた」（Ⅱ歴代 26:6、10、15）。すべてこれらのことにおいて、彼は「主の目にかなうことを行なった。彼は……神を求めた。彼が主を求めていた間、神は彼を栄えさせた。……神は彼を助けて、ペリシテ人……に立ち向かわせた。……（ウジヤ）の勢力が並みはずれて強くなった」（4、5、7、8節）。心の柔らかいうちに、神に信頼し従うことを学び、自分を忘れて他人のために奉仕することを学び、イエスのためには命をも捨てることを学び、「わたしは、わたしを尊ぶ者を尊ぶ」（Ⅰサムエル 2:30）と言われた主のみことばを知ることを学ぶ者は幸いである。

【Ⅴ・レイモンド・エドマン 人生の訓練 第二十六章「出世についての訓練」より】

※この本は図書に置かれています。さらに読まれたい方はどうぞご利用下さい。